日本の白鳥　Nihon no Hakucho (Swans in Japan)　(26):65 -66, 2002

本の紹介

山内昇。1999．自然の楽園クッチャロ湖、ラムサール条約登録湿地指定10周年記念誌。クッチャロ湖湿原保全協議会、浜頓別。

この写真集は、クッチャロ湖がわが国で三番目にラムサール登録湿地となった1989年から10年が経過したのを記念して発刊された。著者の山内さんは、本会の創立以来の会員で、国有林に勤務のかたわらこれまで長年にわたって浜頓別とその周辺地域で動植物の写真と撮りつづけてきた。今回は、そのうちおもにクッチャロ湖に飛来するコハクチョウを中心に、多くの哺乳類、鳥類、植物の写真がまとめられている。巻末には「クッチャロ湖のラムサール条約登録指定」と題して、クッチャロ湖が登録湿地になるまでの経緯のほか、この湖におけるハクチョウ類の飛来状況、標識個体の記録、テレメーターを用いての渡り調査についてが書かれている。

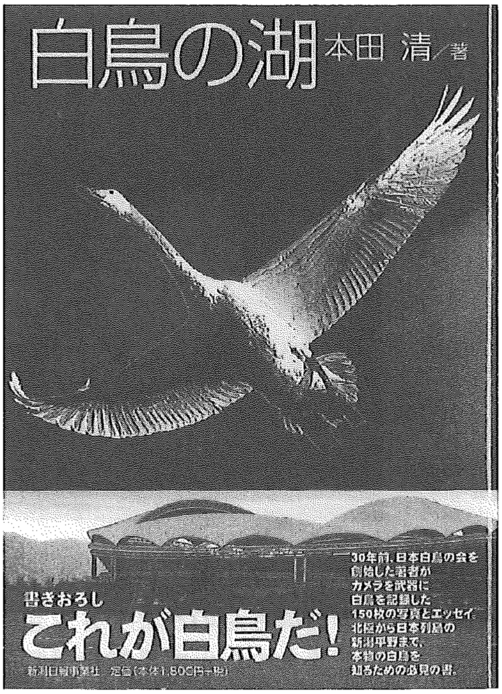
本田清、2001．白鳥の湖、新潟日報事業社。

本会副会長本田清さんのハクチョウ類に関する写真とエッセイ集である。おもな内容は、鳥屋野潟を中心とする越後平野の湖沼とそこに飛来するハクチョウ類の紹介であるが、ロシア極東北部のチャウン湾低地での調査のことや、越後平野以外湖沼ハクチョウ類についても簡単に述べられている。また、餌付けによる特定の場所

への集中の問題点やその解決策の提案など保護のあり方についても言及されている。読みすすんでいくと、この写真・エッセイ集は単なる鳥屋野潟の紹介ではなく、「白鳥の湖はかくして残った」という鳥屋野を埋め立ての危機から守ってきた戦いの歴史となっていることがわかる。むしろ、本田さんはこちらの方のことを書きたかったのだと思う。

この長い戦いには、いろいろの難問題があった。これらを乗り越えて湖を守ろうとした原動力は、湖の汚染と明らかになった埋立計画からハクチョウ類の越冬地が消失するという危機感であった。それにもう一つの原動力は、鳥屋野潟をとりまく亀田郷の農家に生まれ、土地改良にたずさわた本田さんが、鳥屋野潟周辺が「都市化優先への道を走り続ける」ことに耐えられなかったことにもあったように思える。

最近は、ラムサール条約の締結、ガンカモ類重要生息地ネットワークの構築など水鳥類の保護については社会的にも大きな関心がもたれるようになっているが、その土台にはこのような各地での生息環境を守る活動があったことを忘れてはならないだろう。

以上が、本書を読んだ私の感想であるが、これをこの本の紹介にかえたい。

最後に蛇足であるが、「シベリア」について一言述べておきたい。北からの渡り鳥の話になると、「シベリアから」という表現がよく使われ、本書の中でも同様である。かつてウラル山脈からチョコト半島までがシベリアと言われていたが、現在のロシアでシベリアというと、ウラル山脈からバイカル湖あたりまでで、日本に渡来するハクチョウ・ガン・カモ類やシギ・チドリ類の繁殖地はまぎれもなく「ロシア極東北部」である。テレビや新聞などの報道機関は、この地域の政治・経済に関して述べるときには、はっきり「極東」という地域区分をつかっているのに、こと渡り鳥のことになると、同じ地域が「シベリア」になってしまうのである。渡り鳥に対してこれまでもっている既成概念からの惰性だとおもうが、渡り鳥につよい関心をもつ私たち「日本白鳥の会」の会員から率先してこの間違った既成概念を変えていかなければならないと考えるが、いかがであろうか。（藤巻裕蔵）